

都市への他出家族が過疎農山村の高齢者の生活と 農地・山林管理に果たす役割の社会学的研究

代表 丸山 真央（滋賀県立大学人間文化学部 教授）
委員 相川 陽一（長野大学環境ツーリズム学部 准教授）
委員 福島 万紀（都留文科大学文学部 専任講師）

[研究報告要旨]

日本全体の人口減少が始まる中で、地方圏、とくに農山漁村地域の中には、急速に少子高齢化や人口減少が進行している地域が少なくない。将来、人口再生産が不可能になる自治体がかなりの割合に上るという試算もある。そうした中で注目されているのが、進学や就職のために都市部に転出した他出家族の役割である。他出家族は近くの地方都市に居住していることが多く、頻繁に帰郷して在村家族、とくに老親の生活をサポートしていて、農山村の高齢者の生活において重要な効果をもっていると指摘される。

本研究では、全国第2位の高齢化率（平成27年国勢調査）の市町村である長野県下伊那郡天龍村において、全世帯を対象とする質問紙調査を実施して、他出家族に関するデータを収集、分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

①高齢化と人口減少が進行する地域にあって、住み慣れた土地で生活をしていけるかどうかという不安は少なくないが、定住意思は高く、今のところで暮らしつづけたいという意向が強い。

②とくに高齢世帯においては、月1回以上帰郷する他出家族のいる世帯は4割近くに上り、身近の世話をはじめとして、他出家族は高齢者の生活のサポートにおいて一定の役割を果たしている。

③山間地域にあって、農業は盛んでないものの、楽しみや他出家族に送るための自給的な農の活動は盛んであり、そうした自給的農業は、農山村と都市とをつなぐ一資源となっている。

④林業の低迷から、山林は、他出家族も含めて手入れされていることが少なく、山林や林産物が都市とのつながり形成に果たしている役割は必ずしも大きくない。しかし山林の世代間継承という点で、他出家族は今後ますます重要なものになると考えられる。